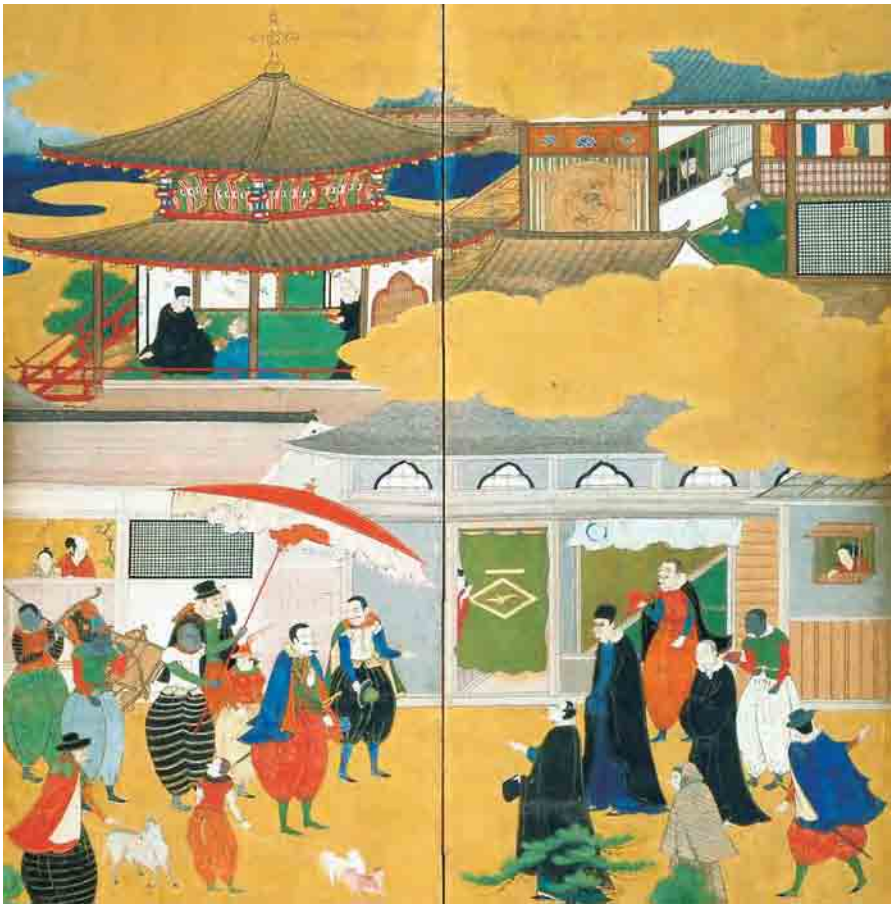
石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第375号 平成27年1月1日発行

当館企画展
没後400年記念 高山右近とその時代



重文「南蛮屏風」(部分) 南蛮文化館蔵

新春を寿ぐ

新春を寿ぐ ―茶道美術を中心に―

墨の美 [書]

香をかざる・茶を楽しむ

新春優品選 ―絵画・彫刻―

- 文化財現地見学報告
- 展覧会回顧
- 1月の行事予定
- 所蔵品紹介

新年のご挨拶

館長　嶋崎 丞

明けましておめでとうございます。

森本駅から金沢駅までの新幹線用の高架工事が始まった頃、何時になったら開業するのだろうかと眺めていましたが、いよいよ二ヶ月半後、三月十四日開業することになった事は周知の通りです。金沢が終点なので多くの方々が石川県、特に金沢へ見えられる事は確実で、そうした人々をお迎えして、どのようなおもてなしをするかが、地元民にとって重要な課題であろうと思われます。

特に観光を目的として訪れる人々は、石川県や金沢でなければ見られない、体験できない物を求めてやって来られる筈で、それらが何であるかを地元民は十分に検討しておく必要があると思われます。

幸いにも私ども美術館が対象とする美術・工芸の世界は、日本はもとより世界に通ずる資質や内容を持っており、それが石川県や金沢の文化的個性や特色となっています。そうした事柄を、美術館活動を通じて体験鑑賞していただくのが、私ども美術館の最高のおもてなしの方法であると考えました。

従って新幹線開業の記念特別展は、この地の文化を政策的に育んだ「加賀百万石文化」の集大成ともいうべき「前田家の尊經閣文庫」を全貌に近い形で公開する予定で、このような展観は、今後実現不可能と思われる超豪華版の内容となる予定です。いずれにせよ、平成二十七年度は、石川県、金沢の芸術文化を全館にわたって堪能できる展観の連続としたいと考えています。どうぞご期待ください。

本年もよろしくお願いします。

1月4日（日）～2月8日（日） 会期中無休

主催／石川県立美術館　後援／NHK金沢放送局、北陸放送

高山右近（一五五二年～一六一五年）は織田信長、豊臣秀吉に仕え、武将としての傑出した能力は秀吉をはじめ諸将から高く評価されました。また、千利休の高弟として茶人としても活躍し、同時にキリスト教布教にも尽力しました。

一五八七年、秀吉のキリシタン禁令により棄教を拒否したことで領地を没収され、翌年、右近と親交が深かった加賀藩祖・前田利家により金沢に迎えられます。利家の死後は加賀藩二代藩主・利長により家老扱いを受け、金沢城修築、高岡城築城などに手腕を発揮したと伝えられています。また利休高弟として茶の湯を広める一方、追放されたキリシタン武将（内藤如庵、浮田休閑）を前田家客将に世話するなど、一六一四年徳川家康のキリシタン禁令によるマニラへの追放まで、ささやかながら布教活動を続けました。

二〇一五年二月三日は、高山右近没後四〇〇年の節目にあたります。本展はそれを記念して、右近が生きた戦国時代から天下統一に至る激動の時代を貴重な資料、作品によって重層的な視点から捉え直し、右近の生涯と人物像に新たな光を当てることを趣旨として、右近が晩年の二十六年間を過ごした金沢で開催するものです。

「チョッキ」（伝 高山右近所用）
カトリック大阪大司教区蔵

重文「南蛮屏風」（右隻部分）
大阪城天守閣蔵

第7～9展示室

当館企画展
没後400年記念「高山右近とその時代」

◆展示構成

①高山右近の遺品や歴史資料
②千利休やその高弟たちなど、当時の有力な茶人に関わる茶道美術
③西洋文化の影響を反映した十六世紀から十七世紀の、いわゆる南蛮美術
④石川県をはじめ北陸地方に伝来したキリシタン遺物
など総計約一〇〇点

※一月二十一日(水)閉館後に一部作品の展示替を行います。

◆関連イベント

ミュージアム・コンサート(要申込)
「平井み帆チェンバロ・リサイタル
―鍵盤音楽でたどる『高山右近とその時代』―」
演奏／平井み帆氏(チェンバロ、トーク)
日時／1月12日(月・祝) 午後1時30分
※申込はすでに締め切っています

百万石の文化講座 第3講(聴講無料)
「高山右近と藩老横山家の交わり」
講師／石川県金沢城調査研究所所長 木越隆三氏
日時／1月25日(日) 午後1時30分
以上、会場は当館ホール

◆土曜講座(聴講無料)
会場は当館講義室、午後1時30分より(各日共)

1月10日(土)
「高山右近とその時代Ⅰ―ザビエルの布教がもたらしたもの―」
講師／村瀬博春(当館学芸第一課担当課長)

1月17日(土)
「高山右近とその時代Ⅱ―花開く南蛮文化―」
講師／村瀬博春(当館学芸第一課担当課長)

1月24日(土)
「前田家と利休七哲」
講師／高嶋清栄(当館学芸第二課長)

1月31日(土)
「高山右近とその時代Ⅲ―キリスト教信仰のゆくえ―」
講師／村瀬博春(当館学芸第一課担当課長)

◆ギャラリートーク(展覧会観覧料が必要です)
会期中の毎週日曜日、午前11時から当館学芸員が行います。
(1月4日、11日、18日、25日、2月1日、8日)

◆観覧料

	個人	団体(二〇名以上)
一般	一、〇〇〇円	八〇〇円
大学生	六〇〇円	五〇〇円
高校生以下	三〇〇円	二〇〇円

※当館友の会会員は、受付での会員証提示により団体料金に割引されます。

「哀しみの聖母画像」
南蛮文化館蔵

長次郎「黒楽茶碗 銘『シコロヒキ』」
(千利休所持) 今日庵蔵

学芸員の眼

キリシタン史家の海老沢有道氏は著書『高山右近』のはしがきで、「他領を侵し、覇をとなえるのが英雄というならば、彼は戦国の敗残者の一人に過ぎないであろう。しかし、彼の敗残は、人生の勝利の姿であり、彼こそ身を以て人間として生きた英雄であった。」と述べています。物質的な繁栄をもって成功とする価値観が揺らぎ、二〇一一年の東日本大震災を機に改めて生命の大切さに向き合った今日、高山右近の生涯を顧みる意義は、まさにこの言葉に集約されます。右近の生涯は、経済的な指標にとらわれない新たな価値観を創出することが喫緊の課題となるこれからの社会に、貴重な示唆を与えてくれるのではないでしょうか。

前田育徳会尊経閣文庫分館

新春を寿ぐ

1月4日（日）～2月8日（日） 会期中無休

「一年の計は元旦にあり」という諺があります。これは、「物事は最初が肝心である」ということで、重要な意味をもっています。いよいよ、北陸新幹線金沢開業のカウントダウンも最終章を迎えています。石川県の春を寿ぐイベントであり、重要なスタートでもあります。

今回の展示は、前田家が祖とした菅原道真を偲ぶ「天神画像と文房具」や、初釜の季節でもありますし、前田家の代々の藩主たちが嗜んだ茶道を紹介する「茶の湯の美」を中心として、新春にふさわしい吉祥画など三十五点を展示します。同時に開催する企画展「高山右近とその時代」にあわせて、東京の（公財）前田育徳会から特別に借用した「春屋宗園墨跡」・「千利休書状」・「古田織部書状」を展示しますのでご注目ください。

高山右近は晩年の二十六年を前田家に仕えますが、そこには、利休のネットワークが重要な役割を果たしたともいえます。右近は千利休の高弟の一人であり、いわゆる「利休七哲」の一人と言われています。また、同じく古田織部も「利休七哲」の一人です。もちろん前田利家や利長（一説には利休七哲と言われる場合がある）も利休に茶の湯を学んでいます。大徳寺の住持で、三玄院・龍光院・芳春院を開創した春屋宗園は利休との親交はもちろん、織部や小堀遠州の参禅の師でもあります。四〇〇年の時を超えて、信仰ともいえる「茶の道」に心を寄せて、激動の時代を生きた人々の姿に、想いを馳せていただければ幸いです。

「千利休書状」

第2展示室

新春を寿ぐ

－茶道美術を中心に－

1月4日（日）～2月8日（日） 会期中無休

「寿ぐ（ことほ）」とは、言祝ぐとも表記されるように「言葉で祝う」という意味です。

今回の特集では、直接的な言葉ではなく作品の取り合わせや、歴史的に作品が担ってきた意味、そして作品やそこに用いられている意匠の文化的な位置付けなどを意識して、新春を寿ぎます。「茶道美術を中心に」との副題が示すように、初釜を意識して掛物から新春、そして精神のリセットを含意するような作品を取り合わせます。会期がちょうど企画展「高山右近とその時代」に重なりますので、同展に出品される茶道美術の名品に見劣りしないように、今年度すでに展示された作品も再度新たな視点で展示し、当館が所蔵する茶道美術の粋をご覧いただきたいと思います。

新春といえば、吉祥図をテーマとした展覧会が各地で開催されます。たとえば翁、宝船、猿回しなどはその中の定番といえるでしょう。今回は、不老長寿、財運興隆、無病息災の願いを託すこれらのテーマを能面、能装束から、絵画作品に至るまで幅広く取り合わせてみました。新しい年が良き年となりますようにとの願いをこめたこの特集、展示されている作品が数百年にわたり伝えられてきたものだと再認識するだけでもパワーをもらえる感じがします。今回、企画展をご鑑賞の方は観覧券の半券提示でコレクション展示が無料となりますので、是非あわせてご鑑賞ください。

千利休「竹蒔絵波に亀図二重切花入」

第3展示室

墨の美［書］

1月4日（日）～2月8日（日） 会期中無休

書の鑑賞といえば、何が書いてあるかわかるところからはじまると思いがちです。その時点で、「書はわからない」というイメージを抱いてしまう方も多いのではないでしょうか。絵画や彫刻などの鑑賞では、その制作意図や主題がわからなくても自然にその造形や描写が鑑賞されていますが、このような感覚での「作品をみる」という鑑賞の基本が、書ではこの「読めない」というウィークポイントによって妨げになっているように思われます。そこで、書の作品を読むことに固執せず、作品が「わかる」ではなく、"見ることを楽しむ"ような鑑賞方法をご紹介します。

書は文字の形や線、全体の構成など視覚芸術としての多くの魅力を持っています。まず、好きと思える作品を見つけ、絵画を見る時と同じようにこの形がいいとか、バランスがいいといった調和のとれた構成の美しさを自分なりに見つけてみましょう。次に、書独自の要素である筆線を追って見てみます。展示室ならば手のひらに指先でなぞることで、筆の流れ、リズム、筆触、線質など書き手の意識に思いを馳せ、作者の制作体験を追体験できることでしょう。その中で自分がなぜその作品がいいと思ったのか、その作品の良さを「見つける」ことや「気づく」ことを目指して作品と対話してみてはいかがでしょうか。

今回の「墨の美」の展示では、今まで書の作品には関心のなかった方にも、このような書の作品との対話で、作品が語りかけてくれる書の美の特性に眼を向けてみるきっかけになることを願っています。

江川碧潭「大無心」

第5展示室

香をかざる・茶を楽しむ

1月4日（日）～2月8日（日） 会期中無休

一階企画展示室で開催中の「高山右近とその時代」にあわせて、近現代工芸部門でも茶の湯に関わる展示を行います。工芸作家も茶道人口も多い石川県は、日展や伝統工芸展に出品する作家が、季節の茶会に合わせた新作茶道具を制作することも珍しくありません。

今回は香合や香炉、香盆など、香道や茶道の炭点前を彩る道具をはじめとした茶道具、美術工芸品の実用品としての側面にスポットを当てた展観です。残念ながら展示室では香りをご提供できませんが、さまざまな装飾が施された作品から、お好きな香りを想像してお楽しみいただきます。

茶道具では、少々季節が早いのですが、松田権六による棗の優品「流水桜文蒔絵神代欅棗」を展示します。この素地は、現在木工芸の人間国宝である川北良造が挽いています。併せて川北が兼六園の姫小松で制作した棗もご覧いただきます。

また突き当たりの展示ケースでは、茶道具の取り合わせ展示として、梅尽くしで作品を合わせます。友禅の人間国宝・寺井直次の「金胎蒔絵水指 梅」、茶碗の名手としてつとに知られた九代大樋長左衛門による「黒釉内梅花紋茶盌」、朱漆と黒漆の一対である、上棚宗佐「朱黒漆塗梅形中次」に加えて、十三代宮崎寒雉の「霰真形釜」の松の側を出し、竹を編んだ盤に漆を塗り上げた小森邦衛の「籃胎提盤」を合わせることで松竹梅としました。新年を寿ぐ展観としてもお楽しみください。

寺井直次「金胎蒔絵水指 梅」

第4・6展示室

新春優品選

－絵画・彫刻－

1月4日（日）～2月8日（日） 会期中無休

日本最古の年中行事、正月。現代も私たち日本人は来る年の幸福を願い、清新な気持ちで新年を迎える準備にあたります。展示室も少しの華やぎと、清新さを備えた作品群で、お客様をお出迎えします。

日本画の部門からは、横山大観「長江の朝」を出品します。本作は金地の屏風に水墨で描かれています。金地の余白を、長江の流れと朝日の輝きに見立てた雄渾な一作は、新年を彩るに相応しい作品といえるでしょう。その他に最後の浮世絵師、伊東深水の数少ない男性像「酔燕台翁（すいえんだいおう）」、安田鞍彦「飛鳥をとめ」などを展示します。

洋画からは村田省蔵「芽吹き」を紹介します。本作は一昨年に開催した「村田省蔵展」に出品された一作です。描かれているのは稲架木（はさぎ）。稲架木は村田省蔵が好む題材の一つです。稲を架けるために人工的に植えられたもので、豊穣を予感させる題材です。さらに稲架木には緑が芽吹き、空にはプラチナを使い、春らしさの演出に一役買っています。

彫刻では、当館のブロンズ作品中一番の大物で、畝村直久の代表作といえる「和」が展示されます。「知・情・意」を統合する「和」をテーマとした三人の女性群像は、作者が五十三才で急逝する前年に制作した渾身の作です。その他吉田三郎の「寿老人」も展示します。小品ながら写実に徹した本作は、いわゆる置物とは一線を画し、人格さえも感じさせる一作です。

村田省蔵「芽吹き」

第45回

文化財現地見学報告

平成26年10月18日（土）～19日（日） 実施

今回の現地見学旅行は「祈りの美 ―京都・山城の寺社を訪ねて―」と題して、京都府南部の寺院を巡りました。都から離れた土地で育まれた祈りの形とその美を味わっていただこうというものでした。

初日にまず訪れたのは、宇治市の萬福寺。僧侶のご案内のもと、異国情緒あふれる境内を拝観しました。昼食は中国式の精進料理である普茶料理で、参加者の皆さまにご好評をいただきました。

続いて向かったのは、修理を終えたばかりの平等院です。色鮮やかに復元された鳳凰堂、その修復の方針などについて学芸員のお話をお伺いしました。

一日目の最後は一休寺。加賀藩ゆかりのこのお寺で、ご住職のお話を聞きつつ静かなひと時を過ごせたことと思います。

二日目の始まりは海住山寺（かいじゅうせん）でした。恭仁（くに）京跡を眼下に見下ろす山の中腹にあるこのお寺へは、バスからタクシーに乗り換えて山道を登って参りました。

次に訪れた浄瑠璃寺では、ご本尊の九体阿弥陀に関するお話を伺った後、特別開扉中だった吉祥天女像などを拝観しました。

昼食を挟んで、最後は岩船寺です。ご住職を始め、地域の人々に支えられてきた祈りの場を体感していただけたのではないでしょうか。

二日間を無事に終えましたのも、参加者の皆さまの温かいご協力のおかげと存じます。この場を借りて感謝申し上げます。友の会では、これからも皆様の期待に応えられるような企画を検討して参ります。

展覧会回顧

―いのちの花― 稲元実展

平成26年10月30日（木）～11月24日（月・休） 開催

昨年八月、稲元実氏の訃報が入り、弔問に伺いました。出迎えて下さった夫人の案内で通されたアトリエは、主を失い静まりかえっていましたが、写真家の秋山庄太郎が撮影した稲元氏の笑顔が優しく迎えてくれました。平成二十年に一度だけお会いした時の、至って無口な印象とはまた違う、もう一つの顔でした。名写真家は、外には見せない画家の本来の姿を写し出したのでしょう。

会場の第4展示室に足を踏み入れると、そんな稲元氏の内にしまった優しさに、展示室が満たされているような感覚を覚えました。今回の展示構成では、「私世界を描き、作品として成立させた画家」を一つの柱に据えたのですが、これは家族を見つめる画家の、眼差しの根底に優しさがあったからこそ成立したのだと、一ヶ月の展示期間で再認識しました。

また、本展のタイトルは、作品から得た印象をもとに「いのちの花」としました。その後、調査を進めていくうちに、師加藤東一が戦争体験や兄の日本画家栄三の自死を通して、「生と死」を描き続けた画家だったことに辿り着きました。生死を直視する師から受け継いだ精神性が、稲元実という日本画家に息づいていたのだと膝を叩いた次第です。

期間中「石川のゆかりにこのような実力派の画家がいたのか」と、多くの方から感動の声を頂戴しました。一堂に作品が並ぶ展示室を眺めるにつれ、この展覧会を企画して間違いなかったと意を強くしたものです。誌面を借りて本展に多大なご協力を賜ったご遺族に、改めて御礼申しあげます。

一月の行事予定

■百万石の文化講座　午後1時30分～　美術館ホール　聴講無料

25日（日）	第3講「高山右近と藩老横山家の交わり」 講師 木越隆三氏（石川県金沢城調査研究所所長）

■土曜講座　午後1時30分～　美術館講義室　聴講無料

10日（土）	「高山右近とその時代Ⅰ ―ザビエルの布教がもたらしたもの―」	村瀬博春 担当課長
17日（土）	「高山右近とその時代Ⅱ ―花開く南蛮文化―」	村瀬博春 担当課長
24日（土）	「前田家と利休七哲」	高嶋清栄 学芸第二課長
31日（土）	「高山右近とその時代Ⅲ ―キリスト教信仰のゆくえ―」	村瀬博春 担当課長

■ビデオ上映会　午後1時30分～　美術館ホール　入場無料

4日（日）	日本の美6　草のこころ―真・行・草より― 極める 匠の世界　今に生きる・手漉和紙 石州半紙技術者会	（29分） （30分）
18日（日）	日本美術史5―2　南蛮美術 世界・美の旅　ベラスケス～素顔の宮廷画家～	（24分） （30分）

ミラノ・ドゥオモ　縦143.8×横110.5cm　平成13年　グループ展 究

所蔵品紹介248

小田根　五郎　おだね・ごろう　昭和19年(1944)～

イタリア・ミラノを象徴する大聖堂を正面から描いた作品です。全長一五八m、全高一〇八・五mの世界最大のゴシック建築を前にして、作者の創造欲は大いに高まりをみせたのでしょう。本作「ミラノ・ドゥオモ」は、それまで描き続けてきた夢幻的な作風から離れ、求道的で厳しく激しい世界を築き上げることとなりました。作者にとって一転機を刻んだ作品です。垂直線を強調したゴシック様式のドゥオモを、色彩を極力抑えて執拗に塗り重ね、重厚であると共に飛び立とうと、天地を打ち振るわせる姿に表現しています。天上の世界を希求する、人の切なる願いと畏れとが、一筆一筆に込められているようです。

作者は昭和十九年京都市生まれ。四十三年に金沢美術工芸大学油画科を卒業。同年第五十三回二科展に出品し、五十四年に同展で特選を得るなど、平成十年まで二科会で活躍しました。平成二年「金沢百景」を描き、北陸朝日放送で放映がありましたので、ご覧になられた方も多いと思います。八年に金沢美術工芸大学教授となり、十九年同大を辞し、名誉教授となりました。過去の遺跡・遺物と現代との関わりを追求し、写実に心情を加味して描き続けています。

次回の展覧会

会期：2月11日(水・祝)～3月22日(日)

前田育徳会尊経閣文庫分館	第2展示室
西洋へのあこがれ —16代前田利為侯のコレクションから—	古九谷の誕生と展開

第3展示室	第4展示室	第5展示室	第6展示室
近代版画	石川の近代彫刻家たち	友禅の名匠 水野博	日本画 構図大研究

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　360円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日(1月は5日)

今月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

1月の休館日は
1日(木・祝)～3日(土)

Meiカード
ポイントプラスデー
毎週水曜日は
エムザでお買物
Meiカード通常ポイント ＋ 3% ポイントプラス
広告
※催事場、地階食品売場などやご奉仕品は、通常通りのポイントとさせていただきます。詳しくは売場係員におたずねください。
MEITETSU MIZA めいてつ・エムザ
金沢 むさし TEL(076)260-1111(代)
www.meitetsumza.com
10時→19時30分(地階レストラン街・書籍は21時まで)

石川県立美術館だより
第375号〈毎月発行〉
2015年1月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/